2014年4月15日 ISSN 0916-9237

アメリカ学会会報

－The American Studies Newsletter－

No.184 April 2014

トランスナショナルな時代におけるトウェイン研究

井　川　眞　砂

マーク・トウェインとその周辺の文学研究の発展をめざし「日本マーク・トウェイン協会」が設立されたのは1997年3月であり，故永原誠会長の下にスタートした。現在，同協会は日本アメリカ文学会に属する「衛星学会」のひとつとして活動している。

マーク・トウェインの日本への受容をふりかえれば，文明開化をめざした明治期に遡るが，その翻訳をとおした本格的な紹介は他のアメリカの作家や詩人――ロングフェロー，ポー，ホーソーン，ホイットマンら――よりも遅れ，1890年代末になる（亀井俊介）。原語に難儀した『ハックルベリー・フィンの冒険』のより正確で精緻な日本語訳は，いくつかの翻訳を経た後，第二次大戦後の石川欣一訳（1958）まで待たねばならない。鎖国を解いて以来，そこまでじつに100年余を要したことになる。こうした事実には，「時代性が決定的な役割を果たしていることを認めないわけにはいかない」だろう。

それでも100年余を要したこの事実は，それぞれの時代を生きた日本の先達が異文化の受容に携わり，弛まぬ努力を続けた証左に他ならない。言語がその土地固有の言葉や文化と結びついているからには，大きく異なる言語の翻訳や文化の移入の難しさがここにも表れているといえよう。文学作品の理解には「テクストの織り目を忠実に読み解く」言語習得や想像力が不可欠だと言うガヤトリ・C・スピヴァクの言葉を借りれば，「他のなにものにも還元しがたい翻訳という仕事，それも言語から言語への翻訳ではなく，身体から倫理的記号作用への翻訳，＜生＞と呼ばれるあの絶えまない往復運動としての翻訳という仕事」への接近によってようやく理解可能なテクストを，実際に翻訳言語に移す作業がつぎに待ち受けるゆえ，この仕事は困難なのである。

他方，地理的・政治的な国境を越えて文化が相互に交差する様を，トウェインの翻案や翻訳をめぐる石原剛の興味深い研究を借りて記すなら，たとえば，『王子と乞食』，『トム・ソーヤーの冒険』，『ハックルベリー・フィンの冒険』の日本語への翻案や翻訳に，時代の影響を受けた脚色や変更が見られ，国境を越える（トランスナショナルな）文化の移入が一方的ではなく，双方向的であることが判明する。受容する側も取捨選択するのである。トウェイン作品が人種差別を抱えるアメリカ社会を映し出す一方，受容する側の翻案や翻訳に家父長制や道徳や人権上の制約が見られ，それによって日本文化の時代性が映し出される。

文化が交差する境界は，国境に限らない。人種・ジェンダー・階級も，その境界を複雑に交差し横断する。だが，その現実に対処できているとはいえない実情がある。いまだ支配的な存在によって文化が領有されているならば，それといかに闘うか。また，強者の金融システムを地球上のいたるところに押しつけるグローバリゼーション（地球全体化）によって，その土地と結びついた固有の言語や文化が侵犯されるのを望まぬならば，グローバリゼーションに対する批判的姿勢を忘れてはなるまい。

日本マーク・トウェイン協会は毎年全国大会を開催するとともに，第2期亀井俊介会長の下で機関誌『マーク・トウェイン研究と批評』（南雲堂，2002）を創刊以来，年刊で現在第13号である。会員の研究成果を掲載し，同時に，幅ひろい一般読者とともに親しめる魅力的な雑誌をめざしている。その一方，海外の研究者と活発な交流を進めており，日本の研究成果を積極的に発信するために，2004年，英文機関誌 *Mark Twain Studies* を創刊，ほぼ3年毎の刊行で，現在第3号。また，エルマイラ大学で4年毎に開催の「マーク・トウェイン研究国際会議」に多くの会員が参加し，発表している。2013年，その第7回会議に，留学中の2名を含む14名が日本から参加し，10名が発表，1名がパネル司会者を務めた。さらに，The Western Literature Association（＝MLAの西部地方組織）会長リチャード・ハットソンより招請を受け，2013年の年次大会（於バークレー）特別パネル“Mark Twain: The View from Japan”で，本協会から会長はじめWLAの会員4名が報告し，好評を得た。日本のトウェイン研究を直に聴く場を設け，太平洋を跨いで研究交流をしようというものである。

協会設立メンバーの“Founding Fathers”からその運営を引き継いだ第6期（2012-15）の現在，発足当初の地力を衰えさせてはなるまいと気を引き締めている。

（日本マーク・トウェイン協会会長）

『アメリカ研究』第 49 号「特集論文」募集のお知らせ

特集テーマ：モンロー・ドクトリン再考

1823 年 12 月 2 日，モンロー大統領が第七次年次教書の中で発した 6383 語あまりの言葉の中の 956 語は，後にアメリカの外交政策とみなされ，“ドクトリン”と呼ばれるようになった。その言説は，各時代の情勢の中で様々な形に変奏されてアメリカ国家の空間的・時間的位相を作り出してきた。

北アメリカ大陸の合衆国領土を対象としてきたアメリカ研究は，現在，地球規模の枠組みの中で再編成されつつあるが，「西半球」の「東半球」からの孤立というモンロー・ドクトリンの主張に，アメリカと非アメリカとの境界の規定法についての基本的概念がある。アメリカが，自己の内部と外部とを時代の要請によって定義しつづけてきた過程を検討するとき，アメリカ的自己決定のレトリックとしてモンロー・ドクトリンが機能してきたことが見えてくる。モンロー・ドクトリンは「世界におけるアメリカ合衆国の位置に意味を持たせるための語り口（narrative）を提供」（Grechen Murphy）してきたのである。

近年，アメリカの批評界では，アメリカ研究という地域研究の枠を大陸間的視野の中に設定し，さらには惑星規模にも広げようとする動きが始まっている。19 世紀後半から 20 世紀末までのアメリカ政治・文化・文学を半球思考的枠組みの中で読み直し，大陸間規模で世界を内包しようとする動きにたいする洞察を国際社会へむけて提言したい。核とテロに対する対応に追われる今，モンロー・ドクトリンの歴史的意味を再検討し，電脳空間に支配されたグローバリズムが覆い尽くす現在の世界における意義を見直すことで，アメリカ研究自体の新たな可能性を求めてみたい。以上のような問題関心を提示して，「モンロー・ドクトリン再考」というテーマを立てて論文を募集することにした。歴史的パースペクティヴの中に，21 世紀的洞察を含む刺激的論文の投稿を期待している。

第 49 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

日本アメリカ学会第 49 回年次大会は，2015 年 6 月 6 日・7 日に国際基督教大学にて開催されます。

第 49 回大会での自由論題報告と部会企画提案を下記の通り募集します。会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は大会事務局＜office2@jaas.gr.jp＞宛に，1〜3 のうち該当する件名を明記し，それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

大会関連の連絡用メールアドレスは office のあとに 2 が入りますのでご注意ください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11 月 20 日）
   報告テーマ，1,500 字程度の要旨，およびキーワード 5 つを記載。自由論題での報告は会員に限られます。非会員による申し込みは，締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ，応募内容を暫定的に受理し，入会が認められた時点で正式に審査対象とします。報告者には 2015 年 5 月 15 日までにペーパー（和文の場合 8,000 字〜12,000 字，英文の場合は 5,000〜7,500 words 程度）を提出していただき，学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し，年次大会の前後 2 週間のみペーパーを公開します。大会当日の報告時間は 20 分，報告は 2 年連続を上限とします。なお，報告内容は未発表のものとし，応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また，英語での報告の場合は，要旨・タイトルは英語としてください。
2. 「部会の企画提案」（締切日：9 月 7 日）
   部会のテーマおよび 800 字程度の要旨。報告者案があれば合わせてご提案ください。部会の企画に関しては，以下の申しあわせ事項にご留意ください。第 47・48 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は，第 49 回大会の部会では報告できません。司会者，討論者としての応募も原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため，原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して，学会から謝金・交通費などは支払われませんので，ご了承ください。また，登壇者の構成については，ジェンダーや地域のバランスに配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが，必ずしもそれを条件とはいたしません。
3. 「分科会開催申し込み」（締切日：8 月 31 日）
   新規の場合は，分科会趣旨（400 字以内）と，連絡責任者および賛同者 5 名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも，分科会責任者氏名を添えて，継続する旨をご連絡ください。

なお，全ての企画内容の最終決定は，年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを，あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

会員の皆さまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には，速やかに事務局＜office@jaas.gr.jp＞までお知らせください。

また，メールアドレスをご登録されていない方は，極力ご登録下さいますようにご協力をお願いいたします。

事務局

2014 年　アメリカ学会第 48 回年次大会（沖縄大会）プログラム

（アメリカ学会 HP 上で大会参加登録をお願いします）

1.　開催日　2014 年 6 月 7 日（土）6 月 8 日（日）
2.　会　場　沖縄コンベンションセンター（詳細は同センター HP 交通アクセスをご覧ください）
〒901-2224 沖縄県宜野湾市真志喜 4-3-1　TEL: 098-898-3000/FAX: 098-898-2202
3.　受　付　会議棟 A　エントランスホール
4.　プログラム（詳細は大会当日に会場で配布する【大会要項】に明記します。）

第 1 日　　6 月 7 日（土）
午前の部　自由論題　9：15〜12：00　会議棟 B　B1〜B7 会議場

【自由論題 A　政治・軍事・外交】
司会：高 田 馨 里（大妻女子大学）　討論：佐々木卓也（立教大学）
伊 藤 孝 治（大阪大学・院）　「1890 年代後半における米国の島嶼政策の展開―ハワイとキューバを中心に―」
奥 広 啓 太（ニューヨーク州立大学オルバニー校・院）「国防を巡る政治における政軍関係：陸軍省と議会，1939 年から 1941 年」
繁 沢 敦 子（広島市立大学・院）　「第 2 次世界大戦後の米軍再編・統合の軌跡―文民指導者の役割を中心に―」
四 方 俊 祐（神戸大学）　「冷戦初期の米国の対台湾援助政策と華僑」
小 林 聡 明（韓国・慶熙大学）　「VOA 移転費肩代わり『密約』と沖縄返還―在沖縄 VOA 中継所移転をめぐる日米・韓米交渉―」

【自由論題 B　政治経済・公共性】
司会・討論：佐藤千登勢（筑波大学）　討論：肥後本芳男（同志社大学）
天 野 由 莉（東京大学・院）　「1793 年フィラデルフィアにおける黄熱病の流行と『感性』のパラダイム」
遠 藤 寛 文（東京大学・院）　「正統性と偶然性　――無効宣言論争（1828-33）に見る合衆国における主権観念の諸相」
上田貴和子（一橋大学・院）　「都市復興における性―1906 年サンフランシスコ大地震後の歓楽街再建から売春宿撲滅政策まで―」
須 藤　 功（明治大学）　「アメリカは IMF を支配できたか？（1945-1952 年）」
山 縣 宏 之（立教大学）　「米国シアトルにおけるソフトウェア産業の展開と社会経済的インパクト集積要因・政策の寄与・成長の裏面―」

【自由論題 C　戦争と占領の記憶・トランスナショナル文学】
司会・討論：生 井 英 考（立教大学）　討論：山 本 秀 行（神戸大学）
与那覇恵子（名桜大学）　「米軍占領下の沖縄（1945〜1953）における教員たち　―その悩み，社会的地位と役割が示す沖縄の独自性―」
白 井 洋 子（日本女子大学）　「戦場の記憶―W・D・エアハートと浜田知明の作品から―」
高田とも子（九州大学・院）　「『神』なる力，原子力と創世の物語―William L. Laurence の原爆ナラティブに関する考察―」
牧 野 理 英（日本大学）　「収容所の記憶と 70 年代の日系アメリカ：カレン・テイ・ヤマシタの *I Hotel* におけるアメリカ資本主義へのトランスナショナルな批判的見地をめぐって」
星 野 文 子（一橋大学・講）　「カリフォルニアにおける詩人ヨネ・ノグチの誕生」

【自由論題 D　カリフォルニア・ハワイ・アジア系】
司会：高木（北山）眞理子（愛知学院大学）　討論：貴 堂 嘉 之（一橋大学）
目黒志帆美（東北大学・院）　「併合前夜におけるハワイ王国の独立維持の試み―カラカウア王によるフラの『復興』と『創造』―」
伊 佐 由 貴（一橋大学・院）　「第一次世界大戦の選抜徴兵制とハワイ日本人移民」
徳 永　 悠（南カリフォルニア大学・院）「メキシコ系コミュニティに対する日系人強制収容の影響―ロサンゼルス郡ランチョ・サンペドロ地区を中心に―」
南 川 文 里（立命館大学）　「トランスパシフィック・リトルトーキョー：人の移動の 1952 年体制と在米日系人社会」
大 八 木 豪（京都大学）　「1960 年代・1970 年代におけるアジア系アメリカ人の国際主義：東アジアの地政学，チャイナタウン，人種化」

【自由論題Ｅ　文学と大衆文化】
司会：余 田 真 也（和光大学）　討論：舌 津 智 之（立教大学）
岡 島　慶（早稲田大学）　「*The Bluest Eye* における語りと癒し」
長谷川詩織（愛知教育大学）　「At Home in Africa――オサ・ジョンソンとアフリカにおける家庭づくり」
Meghan Kuckelman（名桜大学）　"Comic Books and Selfhood in Leslie Scalapino's *Zither & Autobiography* and *Trilogy*"
社河内友里（三重大学）　「アメリカン・コミックスにおけるビートニク表象と反順応主義：1990 年代以降のリバイバルにおけるスーパーヒーロー像を中心に」
Mari Nagatomi 永冨真梨（Doshisha University 同志社大学・院）　"Internationalization of Hillbilly Music: Charlie Walker, Hiroshi Toyama and Country Music in Postwar Japan"

昼食休憩　12：00〜13：00

理事・評議員会　12：05〜13：00　会議棟Ａ　A1 会議場

午後の部　会議棟Ａ　A1 会議場

会長講演　"America through Asian Eyes"　13：10〜14：50
Chair, Commentator: Yuko Matsumoto 松本悠子（Chuo University　中央大学）
Speakers:
Nam Gyun Kim（Pyeong Taek University/President, ASAK 韓国アメリカ学会会長）
Jun Furuya 古矢旬（Hokkai School of Commerce/President, JAAS 北海商科大学，アメリカ学会会長）

清水博賞・斎藤眞賞授賞式　14：50〜15：00

Symposium　"United States Policy toward East Asia and Okinawa"　15：10〜17：50
Chair: Fumiaki Kubo 久保文明（University of Tokyo　東京大学）
Speakers:
David Welch（University of Waterloo）
Masaaki Gabe 我部政明（University of the Ryukyus 琉球大学）
Koji Murata 村田晃嗣（Doshisha University 同志社大学）
Edward I-hsin Chen 陳一新（Tamkang University 淡江大学）

懇親会（18：00〜20：00）　会議棟Ａ　レストラン

****

第２日　６月８日（日）
部会　午前の部　9：00〜11：30　会議棟Ｂ　B1〜B7 会議場

【部会Ａ　"Winning the Hearts and Minds: Ideology, Wars, and American Intelligence"】
Chair: Tosh Minohara 簑原俊洋（Kobe University 神戸大学）
Paper 1: Brian Masaru Hayashi（Kyoto University 京都大学）　"Centralizing Intelligence, Creating Hierarchies: The OSS, Asian Americans, and Race during World War II"
Paper 2: Haruo Iguchi 井口治夫（Nagoya University 名古屋大学）　"Intelligence Missionaries in Japan: Bonner Fellers, Boris Pash and Paul Blum"
Paper 3: Yoshiomi Saito 齋藤嘉臣（Kyoto University 京都大学）"Covert Propaganda for a Free Europe: The NCFE, CEEC and the Politics of Exile in the US and UK"（tentative）
Commentator: Yasuhiro Izumikawa 泉川泰博（Chuo University 中央大学）

【部会Ｂ「人の移動」と島嶼・海域をめぐる越境世界】
司会　菅（七戸）美弥（東京学芸大学）
報告１　野 入 直 美（琉球大学）　「帝国時代の『移動する子どもたち』――ハワイ・台湾・沖縄を中心に」
報告２　李　里 花（多摩美術大学）　「戦前のハワイにおけるコリア系移民のトランスナショナリズム―移動，アイデンティティ，祖国独立運動―」
報告３　ジョハンナ・ズルエタ Johanna Zulueta（創価大学）「沖縄における基地労働と移動」

討論　矢口祐人（東京大学）

【部会C　公民権法制定後半世紀，アフリカ系アメリカ人文学・文化は変わったか？】
司会・討論　木内　徹（日本大学）
報告1　西本あづさ（青山学院大学）　「誰がブラックか――人種・文化の境界再考とトニ・モリスン，そしてポストソウル世代の作家たち」
報告2　宮本敬子（西南学院大学）　「黒人女性表象は変わったか――ポスト・ソウル世代のアーティスト Kara Walker と Mickalene Thomas の場合」
報告3　鳥居祐介（摂南大学）　「アミリ・バラカとジャズの制度化――*Blues People*（1963）から *Digging*（2010）へ」
報告4　川村亜樹（愛知大学）　「スポーツ映画のなかのヒップホップ世代――*The Blind Side*（2009）の死角」

【Workshop A　"Embodiment and the Boundaries of the Human"】
Chair: Yasuko Takezawa 竹沢泰子（Kyoto University　京都大学）
Panelists:
Daryl Joji Maeda（University of Colorado, Boulder）　"Hybridize the Dragon: Bruce Lee's Transnational Body"
Amy Sueyoshi（San Francisco State University）　"Asia, America, and the Transnational 'Pre-Queer'"
Yuko Takahashi 高橋裕子（Tsuda College 津田塾大学）　"Body, Gender, and Boundaries: The Embodiment of Education at Women's Colleges in 21st-Century America"
Commentator: Etsuko Taketani 竹谷悦子（Tsukuba University 筑波大学）

昼食休憩　11：30〜13：00

分科会　11：40〜12：55　（内容については，下記「分科会のご案内」を参照ください。）

新理事会　11：40〜12：40　会議棟A　A2会議場

総　会　13：00〜13：30　会議棟A　A2会議場

部会　午後の部　13：40〜16：10　会議棟B　B1〜B7会議場

【部会D　既存システムの限界と専門知の活用】
司会　中島　醸（千葉商科大学）
報告1　平体由美（札幌学院大学）　「20世紀初頭南部の公衆衛生をめぐる専門知―伝統知―現場知の軋轢」
報告2　中嶋啓雄（大阪大学）　「戦後日本における知的交流の再生――アメリカ研究者とロックフェラー財団」
報告3　櫛田久代（敬愛大学）　「1989年エクソン・バルディーズ号油流出事故後の事故再発防止への取り組み」
討論　大津留（北川）智恵子（関西大学）

【部会E　コンタクト・ゾーン（異文化接触地帯）としての沖縄】
司会　喜納育江（琉球大学）
報告1　山里絹子（名桜大学）　「米国統治下の沖縄における『米留』制度―米国留学経験者のアイデンティティ形成と交渉過程―」
報告2　山城雅江（中央大学）　「物量のアメリカと沖縄文学」
報告3　石原昌英（琉球大学）　「米国民政府の英語普及プロパガンダ」
討論　山本　伸（四日市大学）
討論　吉原真里（ハワイ大学）

【部会F　スポーツをとおして見るアメリカ】
司会・討論　川島浩平（武蔵大学）
報告1　清水さゆり（ミシガン州立大学）「ビジネスとしてのアメリガ大学スポーツ」
報告2　南　修平（長野県短期大学）　「ベースボールに込められたもの――『栄光の日々』の中のニューヨーク労働者階級」
報告3　永田陽一（野球史研究者）　「女子職業野球団ボビーズの日本遠征（1925年）―日米野球交流史の一章として―」

【Workshop B　“Pacific Worlds: Empire, Environment, Embodiment”】

Chair:　Fumiko Nishizaki　西崎文子（University of Tokyo　東京大学）

Panelists:

Yu-Fang Cho（Miami University of Ohio）	“Fertile America, Infertile Asia, and Anti-Nuclear Movements”
Kwangjin Lee（Soongsil University）	“What Does Bartleby Prefer Not To?: Reinterpretation of Bartleby’s Resistance with Organizational Theories”
Mayumo Inoue 井上間従文（Hitotsubashi University 一橋大学）	“Critique of Friendship: On Global Sovereignty and Its Nation-forms”

Commentator: Grace Elizabeth Hale（University of Virginia）

5.　注意事項

1）大会参加登録は，当学会ホームページの大会参加登録ページ上で 5 月 10 日までにお願い致します。今年度は大会会場となる沖縄コンベンションセンターに提出する書類の関係上，早めに参加者数を把握する必要がありましたため，アメリカ学会のホームページ上で 3 月上旬より参加登録を開始させていただき，3 月末でいったん集計いたしました。その後も登録を受け付けておりますので，まだの方は 5 月 7 日までにお願いいたします。

2）懇親会の参加には事前の申し込みが必要です。大会参加登録でお申し込みのうえ，懇親会費 6,000 円を同封の払込書にて 5 月 10 日までにご納入ください（期日厳守）。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返しできませんので，ご注意ください。

3）年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。

4）非会員の大会参加費は 1,000 円です。会場受付にてお支払いください。

5）昼食：6 月 7 日（土），8 日（日）ともに，沖縄コンベンションセンター内レストラン「太陽市場」をご利用できます。また，お弁当の申し込みも受け付けますので，希望者は大会参加登録ページからお申込みのうえ，同封の払込書で 5 月 10 日までにご納入ください。

6）その他，随時，学会 HP および会員用メーリングリストで情報をお伝えしていきます。

7）会場までの交通アクセスは，沖縄コンベンションセンター HP をご覧ください。会場は那覇市内ではなく宜野湾市にあります。

8）宿泊や交通手段の確保も各自でお願いいたします。なお，学会 HP に JTB 沖縄の航空券・宿泊予約ページを掲載しますので，必要に応じてご利用ください。

6.　会場案内

受付	会議棟 A　エントランスホール
書店等の出展	会議棟 A　エントランスホール
本部スタッフ・役員控室	会議棟 A　A2 会議場
外国人ゲスト控室	会議棟 A　A3 会議場

6 月 7 日（土）

午前	自由論題　会議棟 B　B1〜B7 会議場
昼食時	理事・評議員会　会議棟 A　A1 会議場
午後	会長講演・授賞式・シンポジウム　会議棟 A　A1 会議場
懇親会	会議棟 A　レストラン

6 月 8 日（日）

午前	部会およびワークショップ　会議棟 B　B1〜B7 会議場
昼食時	分科会　会議棟 B　B1〜B7 会議場
新理事会	会議棟 A　A2 会議場
総会	会議棟 A　A2 会議場
午後	部会およびワークショップ　会議棟 B　B1〜B7 会議場

第 48 回年次大会　分科会のご案内　6 月 8 日（日）11：40〜12：55

*会場はすべて会議棟 B　B1〜B7 会議室です。部屋割りは参加登録者数を見て決定します。
**午前・午後の部会・ワークショップに使用される大き目の会議室を分割してご使用いただく分科会もあり，分科会の開始前と後には，会議室の分割と統合の作業が必要になります。参加者の皆様には協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

1.「アメリカ政治」 責任者：西山隆行（甲南大学）nisiyama@center.konan-u.ac.jp
テーマ：「日米の福祉国家レジームの比較」
報　告：佐藤晶子（大阪大学・院）「科学技術の受容と変容：占領期の公衆衛生を事例として」
討　論：未定

2014 年度のアメリカ政治分科会は，前半で，覇権国で占領を主導したアメリカが，被占領国の日本で，自国の科学技術をどのように受容させ，変容させたかという課題について，報告していただく。具体的には，米国大統領府予算局顧問であった W.エドワーズ・デミングの統計的品質管理が民間主導の抗結核薬製造を促し，結核死亡率低減という日本の公衆衛生向上に貢献した過程について説明していただく。その上で，アメリカと日本の社会政策の性格の違いについて検討する。その際には，何名かの討論者を交えて議論し，日米の福祉国家レジームの特徴について考察することにしたい。

後半では，次年度以降のアメリカ政治分科会の在り方について参加者から意見を寄せていただき，アメリカ政治分科会，ひいては，アメリカ政治研究の在り方について検討・考察する。時間が許せば，最新の研究動向や各種資料の入手方法などについて，情報を交換する機会も設けたい。

2.「アメリカ国際関係史研究」 責任者：藤本博（南山大学）hiroshif@nanzan-u.ac.jp
報　告：平田雅己（名古屋市立大学）「ベ平連による脱走米兵支援活動と米国の干渉 1967-68 年」

本年度は平田雅己氏（名古屋市立大学）に報告をお願いし，冷戦史研究の課題に関する議論を引き続き行ないたい。平田氏からは，1967 年から 68 年にかけて「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」が日本国内で展開した脱走米兵支援活動に対する米軍当局の監視・干渉活動の実態について報告していただく。平田氏の報告目的は，ベ平連の活動に関する米軍当局の公文書の内容を紹介し，これまで十分に研究されてこなかったベ平連運動の国際的影響力の一端を明らかにすることにある。近年，外交史と社会運動史を架橋する視点や，各国における社会変容を射程に入れた冷戦史研究の可能性が語られている。平田氏の報告ならびにフロアーからの質疑を通じて，とくに外交史と社会運動史を架橋する研究上の意義や方法論等について議論を深めることを期待している。

3.「日米関係」 責任者：浅野一弘（札幌大学）k-asano@sapporo-u.ac.jp
報　告：照屋寛之（沖縄国際大学）「基地問題と選挙」
討　論：浅野一弘（札幌大学）

「沖縄の中に基地があるのではなく，基地の中に沖縄がある」と形容される程，沖縄には巨大な米軍基地があり，それが戦後 69 年，祖国復帰後 42 年を経ても存続し続けている。戦後の沖縄の政治・行政はもちろんのこと，選挙に大きな影響を与えた。復帰後も県知事選挙をはじめ各種選挙のたびに基地問題が争点の一つであった。

2000 年以降の選挙では，普天間飛行場の名護市辺野古への移設の賛否をめぐって与野党が激しく争ってきた。ところが，最近の選挙では，自民党も辺野古移設では選挙を戦えなくなったので，これまでの「辺野古移設」から「県外移設」を訴えるようになり，争点のぼけた選挙が繰り返される傾向があった。にもかかわらず，選挙後自民党の県選出国会議員，自民党県連，県知事は辺野古移設を容認することになり，選挙時の公約は悉く破棄され，有権者との信頼関係を大きく損ねている。

本報告では，沖縄の政党の選挙公約が基地問題によってどのように影響され，公約が破棄される背景を中心に行い，基地を抱えた沖縄で基地問題が政党，選挙にどのような影響を与えているかを論じたい。

4.「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp
報　告：木下なつき（北海道武蔵女子短期大学）「企業・組織形態から見る黒人生命保険会社の歴史と戦略」

アメリカ合衆国において，生命保険会社の歴史は，人種・エスニック集団の相互扶助の歴史でもあり，様々な企業・組織形態の変遷ともなってきた。本報告は，黒人に主眼をおき，まずは，植民地時代からの友愛組織を通じた相互扶助の伝統，奴隷解放後，19 世紀後半のフラターナル保険組合の形成，そして，19 世紀末から 20 世紀前半までの黒人生命保険会社設立期までを概観する。続いて，1940 年代-50 年代の黒人生命保険会社ビジネスの最盛期から，1960 年代以降の縮小期を見ていく。その際，株式会社か相互会社かという企業形態の選択が，黒人生保各社の地域的・社会経済的背景や経営戦略と関連する事を明らかにし，黒人生命保険会社のリスクに対する態度を検討したい。

5.「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学）nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp
テーマ：アジア系アメリカ人の生活と戦争トラウマ：実践と理論
報告 1： 北脇実千代（カリタス女子短期大学）「アジア系アメリカ研究とビューティ・カルチャー」

服飾産業にたずさわるアジア系アメリカ人が増えてきたことを背景として，近年ファッションに関する研究がアメリ

カで多くみられるようになってきた。本報告では，このような研究動向もふまえつつ，戦前のロサンゼルス日系アメリカ人社会における裁縫学校に焦点をあて，日系人女性にとって裁縫を修得することの意義，また裁縫を通して女性たちが日系人社会のビューティ・カルチャーの形成にどのように関わったかをみていきたい。

報告 2：Yasuko Kase 加瀬保子（University of the Ryukyus　琉球大学）

“Bridging Theories of Trauma and Disability: War Trauma and the Asian Diaspora”

Analyzing two Asian American literary texts on World War II, Odori (2007) by Darcy Tamayose and Anshu: Dark Sorrow (2010) by Juliet S. Kono, this presentation examines the drastic effect of disabling trauma on the sense of the normalcy, temporality, and spatiality of the diasporic subject by bridging trauma and disability studies.

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：小野直子（富山大学）ono@hmt.u-toyama.ac.jp

報　告：白石（那須）千鶴（淑徳大学他・講）「動物利用のジェンダーと植民地主義――19 世紀アメリカの毛皮取り引きと大平原先住民部族の変容を取り上げて」

本報告の趣旨は，19 世紀アメリカ大陸の大平原で行われていた毛皮交易が大平原先住民部族に与えた影響を，植民地主義の問題性から捉え直した上でジェンダーの観点から分析することである。これまでアメリカ社会の動物問題の議論は，白人中産階級を中心とする動物擁護運動，倫理的菜食主義の主張の流れから，英米に特有な動物保護の動向が強調されてきた。しかしその動物観の主張に多文化主義的観点が欠如していることは，致命的問題点と言わざるを得ない。そこで本報告では，先住民文化と動物の問題を取り上げることからアメリカの動物問題を捉え直し，同問題がジェンダーの観点からのみならず植民地主義的観点から分析議論する必要性があることを示したい。その為に，19 世紀後半に大規模に展開された西部開拓の中で，大平原部族に悲劇的影響を与えたバッファロー激減の問題を取り上げ，致命的影響を受けた大平原部族文化をバッファロー依存への過程から動的に捉え直した上で，そのバッファロー専門化の生活様式の変化が先住民女性に与えた影響を当時のアメリカ社会の植民地主義的視線とともに分析する。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otsuma.ac.jp

報　告：伊藤敦規（国立民族学博物館）「米国先住民資料の所在と管理情報の現状，国立民族学博物館の Info-Forum Museum 構想の報告」

日本国内のいくつかの博物館や研究機関等は，米国先住民に関する物質文化資料および映像・音響資料を所有している。しかしながらこれまで，その所在やデータ管理についての体系的な調査や研究はほとんど行われてこなかった。本発表の目的は，第一に，米国南西部先住民（特にホピ）の民族誌資料の日本国内の所在と情報管理の現状を報告し研究者間での共有を図ることにある。またその過程で，資料の来歴が収蔵機関によって多用で，ドキュメンテーションの状況も機関間での統一は見られない点が明らかになる。こうした現状に対して国立民族学博物館は，「フォーラム型情報ミュージアム」構想を立ち上げ，収蔵機関・ソースコミュニティ（民族誌資料の制作者や使用者やその子孫）・研究者・一般の利用（閲覧）者の利便性を高める計画を 2014 年 4 月に開始した。本発表の第二の目的として，フォーラム型情報ミュージアム構想の概要を説明するとともに，その運用の前提となる研究者とソースコミュニティの人々との協働の必要性について，文化人類学的観点から考察する。

8. 「初期アメリカ」 責任者：石川敬史（東京理科大学）takafumi@rs.kagu.tus.ac.jp

報　告：石川敬史（東京理科大学）「J・G・A・ポーコックの『新しいブリテン史』におけるアメリカ革命」

初期アメリカ研究は，アメリカ研究一般の中でもとりわけ大西洋史諸研究の成果との相性が良い研究分野といえよう。事実，近年においても社会史，経済史，教会史，政治史などの各分野で活発な研究活動が展開されている。

こうした近年の動向に鑑みて，本分科会では，報告者が翻訳に参加した J・G・A・ポーコック『島々の発見―「新しいブリテン史」と政治思想』（名古屋大学出版会，2013 年）におけるアメリカ革命論を紹介し，ブリテン史の文脈から見たアメリカ・カナダ論を検討する。

本報告の狙いは，『マキャベリアン・モーメント』に示されるようなポーコックの難解複雑なアメリカ革命論を検討することではなく，彼のブリテン史研究の成果を通して，初期アメリカ研究により豊かな視野を提供することにある。

9. 「文化・芸術史」 責任者：小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp

報告 1：深見麻（日本女子大学・講）「万国博と地域のアイデンティティの再構築：金門博（1939–1940 サンフランシスコ）を例として」

本発表では，1939 年にサンフランシスコで開催された金門万国博覧会が，いかにして地域の歴史や文化の独自性を視覚的に訴えていったのか，そこに西部の中心都市としての自意識がどう織り込まれ，また時には新しい物語として語られようとしていったかを検討する。使用する史料は主催者トップの手記，博覧会のパンフレット，プロモーション用のイベントや写真，記事，観客の回想録で，比較のためにパナマ博やニューヨーク博にも若干言及する。

報告 2：瀧井直子（早稲田大学・講）「エト・ゲンジロウとロバート・スチュアート・キューリンをめぐって」

エトは世紀転換期の米国で活躍した日本人画家である。近年はオノト・ワタンナの小説挿絵の作者として注目されているが，その活動はまだ謎に包まれている。一方，キューリンはブルックリン美術館のアジア美術部門の基礎を築いた学芸員で，3 度来日した。キューリンの友人だったエトは，彼の作品収集における不可欠な協力者でもあった。報告では二人の交遊関係からエトの実像に迫り，20 世紀初期の日米文化交流の一端を紹介する。

新　刊　紹　介

野村達朗 著

『アメリカ労働民衆の歴史――働く人びとの物語』

（ミネルヴァ書房，2013 年，3,780 円）

本書は，アメリカ労働史研究の先達で，第一人者でもある野村達朗氏による建国からオバマ期に至るアメリカ労働史の概説である。団体や人名等の原語表記を避けてカタカナにするなど読みやすさに配慮されている。アメリカ労働運動史といえば，本国ではジョン・R・コモンズやフィリップ・フォーナーとかの何巻本がすぐに思い浮かぶが，日本ではマルクス主義の強い影響力のもとで「反体制」論として始まった労働運動史は，しかしながら，版を重ねるような日本語の概説をほとんど持たずに今日に至っている。ともあれ，著者が長年に及ぶ労働史の研鑽の成果をまとめて世に問うたことは日本のアメリカ史研究に計り知れない恩恵をもたらすにちがいない。

評者から見ると，著者は IWW（世界産業労働者同盟）専門の研究者で，若き日にウエイン州立大学に留学し多くの資料を持ち帰ったが，帰国後裁判記録など一部資料を解析したのみで IWW 本出版はならなかった。専門は，19 世紀末から第一次大戦頃までのヨーロッパ移民によってアメリカ労働者の根幹が形成される頃と思われる。

著者はアメリカの労働史や社会史について非常に多くの研究史レビューを書いている。従来型の運動史や労使関係史でなく，ニューレイバーヒストリーをこそ日本の研究者もめざすべきだと主張されてきた。本書にもその片鱗が見られる。ただ，労働現場のみならず，生活や文化を含めたトータルな労働者の歴史をよみがえらせることは難題であり続けている。本書では，労働民衆がメインストリームの政治に影響を及ぼす様は最終的にアメリカ大統領選挙における労働民衆側の候補者の得票数に表れるという見方をしている。また，AFL などの組織労働による労働者組織化の成功の度合いが労働民衆の福祉に大きな影響を及ぼすとされる。アメリカ労働者の組織率は 1930 年代に 30%を超えた後，現在は 10%内外である。他方でしかし，ブッシュよりはオバマのほうがはるかに労働者寄りである。つまり，数字で見るよりも大きな影響力を労働側は行使しているのかもしれない。今日のアメリカでは組織化は労働運動の専売特許ではなくなった。資本家も共和党も組織に訴える。本書の展望が「ほのか」なのも先行きの闘争の困難を示唆していよう。

評者と著者を含むアメリカ労働史の何人かで「アメリカ労働民衆史研究会」を組織したのは 1982 年のことで，慣例的にアメリカ史研究会後に一泊して集まるようになり，後に同研究会に吸収され，二泊の合宿研究会となった。当時メンバー数は 20 名ほど。後継のアメリカ史学会の賑わいに比べると，ささやかなスタートであった。

訳語についてひとこと。United Mine Workers, UMW は全米鉱山労組であり，United に「統一」の訳を当てるのは正しくない。それからクラフトユニオンは「職能組合」ではなく，「職種別組合」である。どちらも評者が駆け出しの頃，高名な労働経済学者から教わったものである。

秋元英一（千葉大学名誉教授）

関元 訳

『抑留まで――戦間期の在米日系人』（ユウジ・イチオカ 著）

（彩流社，2013 年，3,780 円）

本書は 2002 年に急逝した日系アメリカ人研究のパイオニア，ユウジ・イチオカ氏の最後の書である。リドレス（戦後補償）史観の中で等閑視されてきた両大戦間の日系社会の変容を，一世の定住への動きと二世問題への対応（教育）という視点から，40 年代以降の歴史との連続性の中で位置づけようとする野心的な書である。残された序文（第 1 章）からもこの書に寄せる強い思いが感じられ，それが高弟の東氏らの力で見事に蘇った。徹底して史料にこだわる実証研究でステレオタイプ化された「歴史」を切り崩してみせる手際の鮮やかさは氏の面目躍如と言えよう。

第二章「第二世問題」は 91 年に日本語で発表されたもので，本書のテーマ「世代（一世と二世）」と二世の「二元性（二重のアイデンティティ）」を鍵概念に，錦衣帰国の夢も遠ざかり定住を決意するようになった一世（戦前は帰化不能）の二世（米国市民）に寄せる期待と不安が，排日運動や極東の政治情勢，日米関係と日本政府の対応などで揺れ動く様が丹念に跡付けられる。二世を如何に教育するべきか？それに二世は如何に応えたか？

舌鋒は鋭いが，人に向ける眼差しは優しい。日米関係の悪化により日本擁護からアメリカニズム一辺倒へ態度を豹変させた二世（第 5 章「二元論の考察」）や，逆に不忠誠とみなされてきた二世（第 7 章「忠誠の意味」）も，アメリカ社会の人種偏見の犠牲者だとする見方は一貫している。「二世を人種的理由から圧倒的に拒絶した社会において，不忠誠な二世というカテゴリーが何らかの意味をもてるのか？」と問い，彼らを「不忠誠の二世として日系アメリカ人史の埒外に置くことに正当性はない」と主張する。あとがきでゴードン・チャン氏が述べているように，「市岡の学問は彼の人柄及び政治的献身と不可分」である。「『埋もれた過去』…を掘り起こす努力が，人種主義を知的に暴いて反対し，そうした抑圧を蒙った人々に力を与えるという大きな目的に通じた」。

真珠湾直後の一世（敵性外国人）の逮捕・拘留は，「一世の日本との強固な一体化」が招いたものだが，「国籍取得不適」とされた彼らには「アメリカに政治的に一体化するものがなかった」と理解を示す。他方で，1941 年の立花スパイ事件（第 9 章「真珠湾前夜の国家安全保障」では司法省の政策にも一定の正当性はあったとする。FBI の取調べ中に自死した日本人医師（第 11 章）の虐待説についても，残された資料から，日本での従軍経験がある彼が「生きて虜囚の辱めを受けず」という軍規に従ったものという新たな可能性を示している。一世・二世の「日本人」としてのナショナリズムは，リドレスが実現するまで，氏が公表を避けていた論点であった。

最後に，書名の internment に対する「抑留」という訳語は，通常外国人に対する拘留を意味し，本件では司法省の政策に関してのみ用いられることが多い。煩雑さを避けるためかも知れないが，二世を含む収容政策全般について用いられている点に多少の違和感を覚えたことだけ付言しておきたい。

村川庸子（敬愛大学）

マーク・ガリキオ 著　伊藤裕子 訳

『アメリカ黒人から見た日本，中国 1895–1945——ブラック・インターナショナリズムの盛衰』

（岩波書店，2013 年，4,410 円）

近年，アメリカ黒人史を考える枠組みとして，アメリカ合衆国を超えて世界中の黒人（有色人）との連帯を志向する黒人の立場が注目を集めている。帝国による植民地支配をアメリカ白人による黒人支配に重ね，被植民者の窮状と自らの苦難との同質性を見た黒人は，国際政治が内包する人種的要素の観点から国際情勢に影響を及ぼした。本書の著者は，黒人のこうした世界観を「ブラック・インターナショナリズム」と呼ぶ。9 章から成る本書は，20 世紀転換期から第二次世界大戦後までのブラック・インターナショナリズムを，アメリカ黒人の対日観・対中国観に焦点を絞って論じている。

1 章「有色人種の擁護者」では，日露戦争で白人国家ロシアを敗った日本が，第一次世界大戦後パリ講和会議で人種平等条項の国際連盟規約への挿入を求め，有色人種の擁護者として不動の地位を築いた経緯が論じられる。2 章「有色人種の潮流の高まり」では，世界戦争を契機にアメリカ黒人社会で人種関係を世界規模でとらえる視点が定着し，日本への期待が高まった経緯が示される。しかし，大恐慌と以後の不況の時代に共産党が影響力を増す中で，黒人は根源的な問題を突きつけられた。国際情勢を形成するもっとも重要な要因は何か，すなわち 3 章の章題が示す「階級か肌の色か？」という問いである。ブラック・インターナショナリストはむろん後者を選ぶ。日本が公然と中国を侵略し，反帝国主義を標榜するソ連を敵視してもなお，日本の帝国主義を解放の一形態と見て擁護し，日本政府が関与した（と思われた）運動に多くの黒人が身を投じた旨が，4 章「『ブラック・インターナショナル』の台頭」で語られる。しかし，日中開戦から日米開戦に至る日米関係の悪化の時期に，日本支持という国家反逆を犯さずに，国際政治上の人種要因を強調する必要性が高まると，アメリカの民主主義に忠誠を誓いつつ，黒人に対する民主主義の不適用に抵抗するという，アメリカ黒人の新たな立ち位置が編み出された。「抵抗か不忠か？」（5 章）の選択で黒人の多くが抵抗を選びブラック・インターナショナリズムは変容する。この変容は「人種と国家安全保障」（6 章）の二律背反的な連関を回避する効果を生み，白人リベラルの支持を得ることに繋がる。（7 章「ブラック・インターナショナルと白人リベラル」）日本と距離をおき始めたブラック・インターナショナリストは，連合国四大国の一員として大戦を戦う非白人国家中国に，国際政治における人種平等の擁護者としての期待を託した。しかし，ブラック・インターナショナリストの「中国の再発見」（8 章）は結実しなかった。健全な米中関係を優先した中国がアメリカ国内の人種問題をむしろ避けて通った結果，最終的には「中国の喪失」（9 章）に終わったのである。

フルブライト招聘教員として日本に滞在した経歴をもつ著者による本書は，丹念な資料の渉猟にもとづく興味深い内容の研究書である。本書を明晰な邦語訳で日本の読者に紹介してくれた訳者にも感謝したい。

大類久恵（津田塾大学）

藤田尚則 著

『アメリカ・インディアン法研究（II）——国内の従属国』

（北樹出版，2013 年，9,975 円）

「インディアン部族（トライブ）」は，「より正確に言えば，国内の従属国（domestic dependent nations）と呼ばれ得るであろう。」これは，1831 年の合衆国最高裁判所による判決文の一節である。このチェロキー・ネーション対ジョージア事件（Cherokee Nation v. Georgia）において，ジョン・マーシャル（John Marshall）首席裁判官は，「インディアン部族（トライブ）」は「厳密な意味において外国（foreign nations）」とはいえず，「国内の従属国」と称すべき存在であるとの見解を示した。マーシャル首席裁判官のこの見解は，大学生向けの歴史教科書や一般読者向けの歴史書でも言及されるなど広く知られている。では，「国内の従属国」と呼ばれ得る「インディアン部族（トライブ）」とは，法律学的にどのように捉えるべき存在なのだろうか。本書の目的は，まさにこのような本質的な問いに答えることにある。具体的には，「インディアン部族の『土地』，『部族』，『個々人としてのインディアン』，『部族主権』について—国家の三要素説に対応させて—法律学的に如何に捉えるべきか」（8 頁）を論じることを課題としている。

周知のように，アメリカ社会においては，裁判所は一般市民にとって身近な存在である。そのため，日本の大学生を対象としたアメリカ史の教科書にも，たとえば 1954 年のブラウン対教育委員会事件判決など，有名な合衆国最高裁判決がごく普通に登場する。それとは対照的に，先住民保留地における「部族裁判所」については，たとえ専門的な研究書であっても，言及されることは稀である。そもそも，「部族裁判所」とは何か。その「部族裁判所」は，先住民諸社会の「伝統的紛争解決のメカニズム」（424 頁）とどのような関係にあるのか。さらに，より専門的な関心としては，1880 年代に内務省インディアン局によって各地の保留地に設立された「インディアン犯罪裁判所」（Courts of Indian Offenses）とはどのような関係にあるのか。本書を繙けば，このような疑問に答えるための足掛かりを見出すことができる。

本書の刊行により，前著『アメリカ・インディアン法研究（I）—インディアン政策史』（北樹出版）とともに，法学研究としてはもちろん，アメリカ研究の領域における大著がもう一冊増えたことは，大変喜ばしいことである。「インディアン部族（トライブ）」に関する膨大な法律や判例は，法学研究はいうまでもなく，アメリカ史研究にとっても，豊富に存在する貴重な一次史料という性格を併せ持っている。このような意味において，本書は，「インディアン法」の研究を通じて，「アメリカとは何か」「アメリカ人と何か」という古くて新しいテーマに接近するためのひとつの可能性を示しているともいえよう。

中野由美子（成蹊大学）

ロバート・ジェイコブズ 著，高橋博子 監訳

『ドラゴン・テール――核の安全神話とアメリカの大衆文化』

（凱風社，2013 年，2,520 円）

マンハッタン計画の中で実施された「ドラゴンの尻尾をくすぐる」という実験名が本書の書名の由来である。これは臨界を越え核爆発が起こるのに必要な核燃料を確定するための実験で，原爆製造に直結していた。ドラゴンの尻尾をくすぐって起こしてしまった人類は，以来核との共存を模索しながら苦しむ運命を背負ったのである。

日本人読者にとって，本書はアメリカ国民の核認識の変遷を知る上で興味深い。著者ジェイコブズ氏の子ども時代，核兵器はいつも「心配のタネ」であったという。アメリカ国民の意識の中に核が深く根を下ろしていたことが伺われる。また本書が核の歴史の専門家である高橋氏の監訳で邦訳出版されたことは，時宜にかなって誠に意義深い。「スローすぎて何が起きているかはっきり見えない」（7 頁）放射線被害を，我々は今まさに福島第一原発事故で経験しているのであるから。

本書の中心的論点は，「核のイコノグラフィの核心が社会に変革を迫る物語だったということ」（5 頁）である。冷戦初期のアメリカ人は，核兵器の存在が自分たちに「戦争のない世界を選ぶか，それとも世界の終わりを選ぶか」という究極の選択を迫っていると感じていた。世界の終末が，神の手から人間の手中に委ねられた。

第 1 章～第 2 章では，メディアや娯楽映画が創出した，大気圏内核実験と「死の灰」にまつわるイコノグラフィを論じる。ビキニ環礁の核実験を生き延びた豚のパティや，教育映画のキャラクター「亀のバート君」が，核爆発が起きても生き残れるというメッセージを国民に伝える一方，SF 映画の中では，放射線を浴びて巨大化した昆虫や核実験により生まれた怪獣が原子力の危険性を告発していた。第 3 章では，人類を破滅から救う方法について社会科学者たちが展開した議論が整理される。その議論を通して高まったのは「政治エリート」たる社会科学者の地位であり，彼らの知識は民間防衛活動や兵士の訓練に活用されていったのである。

第 4 章は，「サバイバル・ナラティブ」の分析である。1950 年代後半の水爆時代に製作された映画には，陰鬱な核攻撃後の世界を描いた悲観的な物語が多く，「民間防衛が描く公式見解への強烈なカウンター・ナラティブ」を示していたという。第 5 章では核実験に参加したアメリカ人兵士や風下住民が「原爆の近くでもくつろいでいる」人々というイコノグラフィで表現されたことが指摘される。第 6 章は，1950 年代の子ども文化に焦点を当て，ベビーブーム世代の子どもたちが受けとった「安全などどこにもない」というメッセージは，権威に対する幻滅に結びつき，カウンター・カルチャーの起源になったと読み解く。終章は，1963 年に大気圏内核実験が禁止され，若者の心から核兵器が消えたものの，コンピューターゲームで核戦争後の世界が描かれ続けたと指摘する。

著者が指摘する通り今なお核は大衆文化の中に残っているが，果たして現代の核のイコノグラフィは社会に変革を迫る物語たり得るのだろうか。

土屋由香（愛媛大学）

山城雅江 著

『Pop の交錯する地勢――アメリカ/ウォーホルと沖縄のポップ文化誌』

（学術出版会，2013 年，5,880 円）

キャンベル・スープ缶でお馴染みのアメリカン・ポップアートの旗手アンディ・ウォーホル，彼が築いた戦後アメリカの大衆芸術と関連する「Pop/pop/ポップ」というキーワードで戦後沖縄の文化表象を読み解こうという本書は全 15 章で構成されているが，紙幅を鑑み上位範疇である第 1 部「Pop/pop」，第 2 部「デモクラシー」，第 3 部「アメリカ/沖縄」をそれぞれ概説したい。

第 1 部はウォーホルの批評史から始まり，これまでのウォーホル作品の解釈として主流の「シミュレーション」，「イメージ」を改め，「現実」への「イフェクト」という解釈への修正が促される。次に占領期沖縄についての詳述を経て，なぜか音楽ジャンルに限定的に用いられている「沖縄ポップ」という言葉，音楽の伝統性，代表的沖縄ミュージシャンの通史的説明で結ばれる。

アメリカ民主主義と大衆文化の成立過程の復習で始まる第 2 部は，「表面性（surface）」や「みんな（everything/everybody）」などウォーホルの芸術論に展開し，その「透明さ」や「入手可能さ（理解しやすさ）」，および「全員参加型」，「平等」という点に「デモクラシー」との隣接性が指摘されている。次いで，沖縄文学に散見される「米琉親善」というテーマへの言及を経て，「伝統」や「蓄積」を欠いているが故に万人に開かれていた戦後沖縄の「水平的」美術状況が，先述したアメリカの Pop art の平等性と，奇しくも符合すると結ばれている。

第 3 部冒頭部，筆者は写真集『America』の不完全で不統一な写真群に認められる脱アート的で非アーティスト的な特徴および人間を「マシーン」と同一視するウォーホルの姿勢に Pop の神髄，肯定的な意味での「交換可能性」という大衆平等的「イフェクト」を見出し，「アメリカ的存在」を代表するファクターであると説く。次に比嘉豊光の写真や高峰剛の映画に見られる沖縄的「アマチュアリズム」に触れ，特に高峰に関しては「Pop」と「un-Pop」を併せ持つ彼の作風にウォーホルの影響を指摘し，終章で沖縄のコラムニスト新城和博が掲げる「沖縄ポップ」の概念を詳述している。

本書を構成する各章が文化，哲学，文学などさまざまな分野の情報に富み，深い考察に基づいた論文であることは間違いない。また，他の都道府県を差し置いて用いられている「沖縄ポップ」という言葉自体の「植民地性」，食糧生活物資が突如大量に注入された終戦前後の沖縄の人々と同時代のアメリカ本国における人種マイノリティとの類似性等の指摘は，沖縄出身者である筆者ならではの鋭い洞察である。ただ，（上記概説にも顕著なように）本書が章間の連結性を欠き，タイトルと紙幅に比して「米琉の比較」への直接的言及が著しく乏しいという大方の印象を予期していたかのように，それは読者による「総合的な副次的効果」（403）を狙ったウォーホル的 Pop と同様の戦略であると筆者は結論部で述べているが，「文脈」や「比較」に貪欲な評者にとっては（それが意図的であったにせよ）誠に残念である。

柳沢秀郎（名城大学）

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2014 年度の OAH/JAAS Short Residency Program による派遣研究者が次の 2 名に決まりました。

このプログラムはアメリカ史を中心に，日本の大学院生，学部生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので，研究者は各大学に約 2 週間滞在します。研究者の専門領域，受け入れ校と担当者，滞在期間は以下の通りです。これらの研究者を招いて講演会や研究会を開催するご希望のある方は，できるだけ早い時期に受け入れ校の担当者と直接交渉し，この機会を有効にご利用下さい。

Amy Sueyoshi（San Francisco State University）
専門領域：Asian American History; History of Sexuality
受け入れ校/担当者：琉球大学/喜納育江会員（ikuekina@ll.u-ryukyu.ac.jp）
滞在期間：2014 年 6 月 3 日から 17 日まで

Grace Elizabeth Hale（University of Virginia）
専門領域：US Cultural History; History of the US South
受け入れ校/担当者：首都大学東京/辻秀雄会員（tjhideo@tmu.ac.jp）
滞在期間：2014 年 6 月 5 日から 6 月 18 日まで

なお，このプログラムが 2015 年度も実施される場合，受け入れ校となることを希望される会員は 2014 年 5 月 20 日までに事務局（office2@jaas.gr.jp）までご連絡ください。

国際委員会

2014 年 ASA 年次大会のためのアメリカ大使館賞受賞者
および日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について

2014 年 4 月にアトランタで開催される OAH 年次大会を対象とするアメリカ大使館賞の受賞者は天野由莉さん（東京大学大学院）に決まりました。

また，米国留学中の大学院生会員を対象とする旅費・滞在費補助金の受給者は以下の 3 名に決まりました。

平松彩子さん（Johns Hopkins University）
鰐淵秀一さん（Harvard University）
小森真樹さん（Temple University）

おめでとうございます。

国際委員会

訂正　会報第 183 号　10 頁

ご寄付のお知らせ
誤　五十嵐武　　正　五十嵐武士

アメリカ学会事務局の移転について
誤　学協サポートセンター　　正　学協会サポートセンター

上記につきまして訂正し，お詫び申し上げます。

新入会員

齋藤彩世	九州大学大学（院）	人　博　文
島貫香代子	東京大学（院）　アメリカ太平洋地域研究センター助教	文　地　文
ピーター・マンテロ	立命館アジア太平洋大学	メ　政

編　集　後　記

「黒歴史」を映像で再現する。その試みはどの程度「公正」なのだろうか。第 86 回米国アカデミー賞で，『それでも夜は明ける』（2013）が作品賞を受賞した。黒人監督スティーブ・マックイーンが描く奴隷制は圧巻であり，それはスピルバーグ『シンドラーのリスト』（1993）の別ヴァージョンだろう。だが，歴史のスペクタクルな再現は，果たして「公正」と言えるのか。悲痛な映像が，悲劇のアンクル・トムを作る。どんなに優れた演技/演出であれ，再現は「公正」ではない。20 年前と同じ感覚。既視感をおぼえた授賞式だった。

（塚田）

2014 年 4 月 15 日　発行
アメリカ学会
〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502
学協会サポートセンター内
Tel: 045-671-1525　Fax: 045-671-1935
http://www.jaas.gr.jp
発行人　古矢　旬
編集人　庄司啓一
印刷所　啓文堂松本印刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12